

梵

昭斗は橋のたもとにある『梵』という喫茶店に入った。河川敷にある雑木林で野鳥の撮影をした後に一息入れたかったのである。

店から大きな窓ガラスが半円状に張り出して河川敷を見渡せる。時間帯によっては、大学の漕艇部のボート練習もよく見えるだろう。カウンターにイスが数脚、フロアとオープンテラスにテーブルセットがそれぞれ三組というこじんまりした造りだった。

客は誰もいなかった。昭斗はテーブル席に座り、空いているイスにカメラバッグを置いた。

コーヒーが四種類とチーズケーキのみ、というシンプルなメニューが目の前に立ててあり、昭斗はマンデリンを注文した。

「このお店、まだ新しいようですが、建てて間もないんですか」

「いや、そろそろ五年になるかなあ」

短く刈ったごま塩頭のマスターが答えた。思ったよりも高めの声で威圧感がなく、話し好きのように思えた。小太りな体にグレーの手編みのベストが似合っている。

昭斗はこの河川敷に何度か足を運んでいたが、店の存在に気づいたのは今回が初めてだった。入ったばかりのバイト料でふところが温かかったから目に入ったのかもしれない。ふだんは生活費を切り詰め、周囲のものには目をつぶってやり過ごすことに慣れてしまっていたのだった。

感じのいいお店だから、今度左枝と一緒に来たいと思った。二人で喫茶店に入ったのは入学オリエンテーションのあとの一回だけだったのである。

「お店の名前、『ぼん』と読むんですか」

「そう、ちょっと行ったところにお寺があって有名な梵天様を祀ってあるのでそこから採ったんだ。でも調べると、この梵という漢字には木の下を風が通り抜けるという意味が元々あるみたいで、ここの地形にちょうど合っていて、気に入ってる」

マスターは豆を挽き、ドリップで淹れ始めた。湯をほんの数滴ずつ何回にも分けて垂らし、漏斗からポトポト落ちた褐色の滴が細い一筋に縊り合わさってからは湯量を増やしてゆっくりと回し入れた。

丁寧に淹れたマンデリンは旨かった。

コーヒーの値段を見間違ったか、と慌ててメニューを見直したほどだった。昭斗が小さくうなずきながら飲んでいるのがよほど嬉しかったのか、

「店を始めることに周囲はみんな反対してね。会社、といってもたいして大きくもない食品会社に勤めていたんだけど、早期退職の募集があったので申し出て、退職金の大半を懸けてこの店をつくった。辞めて時間だけはあったから、自分で出来ることはそれこそ基礎のコンクリ打ちとか、壁塗りとか、中学の同級生が建築屋をしているものだから、仕事の合間合間に面倒みてもらって、建前とかはそれなりの人数を繰り出してもらったけど、あとはよその工事のヒマをみては造ってもらったから、完成までに全部で数年もかかっちゃって、これオフレコだけど、千五百万円で出来ちゃったんだよ。土地はお袋から相続した自分の土地だし、月々の賃料に追い立てられることもないから、トントンでやれている。…あっ、ついつい、いい気になってジジイの話に付き合わせてしまったね。まあ、ごゆっくりどうぞ」

マスターは少額のように言ったけれど、千五百万円かあ。オレは将来そんな大金にお目にかかることなんであるのだろうか。専門学校を卒業して運良くどこかの雑誌の契約カメラマンなどとして働けばいいが、それだって最初はパシリでたいした給料はもらえないだろうし、ずうっとフリーでかつかつの先輩も多いし。…まっ、そんなに先のことを考えても仕方ないか。

旨いコーヒーを啜りながらさっき撮ってきた野鳥の写真をゆっくりチェックしようと思
い、昭斗はイスの上のカメラバッグに手を伸ばした。

どれほどの時間が過ぎただろう。来客がないのをよいことに写真チェックに没頭して
しまった昭斗が重くなった頭を挙げると、マスターは一枚のハガキにじっと見入っていた。
「すっかり長居してしまってすみませんでした。そろそろ帰ります。ところで、そのハガキ、
じっと見ていたようですが、何が書いてあるんですか？」

代金を払おうとカウンターに近づいて昭斗はのぞき込んだ。差し出されたハガキの裏面
にはブルーブラックの太字で、

『いくさ場を切り抜けいづこ秋の暮れ』と大きく書かれていた。

「これ、俳句ですよ。」

「そうだよ。戦いの場をくぐり抜けて、これからどこに向かうのだろう、秋も終わろうとし
ている、というふうな意味だね。時々俳句を送ってくる友人がいて、こちらも俳句で返事
することになっている。この男、長いこと高校の教師をしていて、最後は校長までやって退
職したヤツなんだけど、現場のいろんな問題に対してそれこそ体を張ってがんばって、やっ
と解放されて、さあ、自分はこれから何をしていけばいいんだろう、という気持ちなんだら
うよ、きっと」

「やっとな仕事が終わったんだから、のんびりと毎日を楽しめばいいんじゃないですか？」

「いや、そうもいかないのが人間の不思議なところで。例えば趣味を見つけてそれをやっ
たしよ。でも、所詮、趣味は趣味。どうしても気が抜けてしまうというか、ほんとにやり
たいことはこれじゃないと思ってしまうというか…」

「マスターはその俳句にどんな返事をしようと思っているんですか？」

「そうだなあ。どこに向かうかといっても、これといった目標など私には無いからね。この
先、この店をもっと繁盛させようとか、焙煎した豆をネット販売しようとか、一切考えてい
ないし。このまんまでいられればそれでいい。コーヒー淹れるのが好きだし、こうやってお
客さんと話ができるのも嬉しい。この店の窓から毎日おんなじ景色を眺めているから、か
えって季節の変化もよくわかる。どこかを目指すのではなくて、ここに居つづけるのが目標
かなあ。でもね、このトシになると、同じ状態で居つづけるにはそれなりの努力が必要にな
ってくるんだ。でも、これじゃあ、返事にならないか…」

「これ、代金です。また来ます。こんど、友だちを連れてくるかもしれません」

左枝を思い浮かべながら昭斗は店を出た。

今回の公演で、左枝はまた脇役に戻ることができた。主役の二人に挟まれて、その二人が
繰り出すセリフと動作に機敏に応じながらのびやかに演じている。点と点が左枝という細
い糸によってうまく結びあわされているという感じだ。

主役の大沼晃一と渡辺郁子は以前から男女の関係になっていて、どうやら最近はどうも
いっていないらしい。でも舞台上では、それぞれが訳ありの過去を持ちながらも徐々に心
を開き合う中年男女という設定を演じている。隠されたお互いの過去も含めて相手のことを
すべて知りたい、そうして愛し合いたいと思いつつも、封印された過去の蓋をあけてしま
うことによって相手を失う怯えも一方では感じている、という役柄を演じている。だがそれ
は、現実の二人とはまさに正反対の状況であり、現実では、共有してきた過去を葬り去ろう
という思いに駆られているのだろう。あるいはほんのわずかな可能性としてどこかでやり
直しのきっかけを求めているのかもしれない。

左枝はその双方の、虚実二つの思いを感受している。それが混ぜ合わせることのできない
二層となって左枝を覆っている。そんな舞台をどのように撮影しようか。

実はこの日、昭斗は劇団代表の國分に呼ばれ、舞台のスチール写真の仕事を依頼されていた。

「君も知ってのとおり、スチール写真は佐久間さんというプロにお願いしている。知り合いだから格安の料金でやってくれてはいるが、このまま頼みつづけるわけにもいかない。そこで、君に頼もうという話になった。専門学校で二年も写真を勉強しているのだから、それなりにいろいろな技術も身につけているだろうし、撮影の現場も知っているだろう。お願いできないだろうか」

「はあ。劇団の下働きなら何でもやりたいと思っていますけど、こればかりは…」

「荷が重いと言うのかな。うちはいわゆる商業演劇ではないから、スチールそのものを宣伝に使って集客を図るというのではないんだ。大手の商業演劇の場合は、上演中に撮るのではなく、別日にスチールだけを撮る。俳優たちが一番きれいに見えるように照明も工夫し、俳優の個性が引き立つアングルを狙う。でもうちの場合は、上演の記録という意味で撮るのだし。それなのにプロのカメラマンに仕事を頼んできたのは、私自身の見栄でもあったんだ。すぐにとは言わない。今度の公演でいろいろ試し撮りをしてみて、次回からでいい。ここは、まげてお願いするよ」

國分の依頼を断る理由はなかった。本当は自分の腕を試してみたいという思いが昭斗に湧いてきた。

左枝を撮りたい。女優としての才能を発揮しつつある左枝は、なんだか少しずつ自分から遠い存在になってしまう気がしている。そんな左枝とスチール撮影で関わることが出来れば嬉しい。

「では、お力になれないかもしれませんが、スチールマンとして働かせていただきます」

「おっ、それは有り難い。引き受けてもらったところで申し訳ないんだけど、実は佐久間さんから、スケジュールがどうしても空けられなくて今度の公演の撮影は無理だという連絡をもらっていて、別のカメラマンを捜そうと考えていたところなんで、だまし討ちみたいで悪いが、今度の公演からお願いできれば尚更有り難い。この通りだ、よろしく」

國分はイスに浅く座り直し、両手を膝に置いて深々と頭を下げた。否とはいえない雰囲気があった。昭斗は「はい」と小さな声で、しかし國分の目を直視して答えた。

スチール写真とは、映画や演劇のような動きのある芸術を静止（スチル）した画像に置き換えたものを言う。上演の記録という意味から出演者全員が一度はどこかに写っていることが必須だが、サワリの部分を誤りなく収めてその劇の感動を永久にとどめておくことが生命線になる。技術があるからといって安請け合ひできる仕事ではない。

昭斗は日に日に恐くなってきた。そこで、不安を取り除くために今回の台本を何度も何度も読み込んだうえで、演出の古坂に相談し、撮るべき場面を確定させた。すべてのセリフを暗誦している昭斗に、古坂が驚いたのは言うまでもない。

そもそも昭斗がなぜ写真を志すようになったか。それは笹尾家で年一度必ず写真館に行って撮影する「家族写真」の習慣も大きな要素だった。職人氣質の父親だったが、その日はスーツ姿になり、母にも盛装させて行くのだった。昭斗の同級生たちの大半はいわゆる勤め人の家庭であり、スーツにネクタイという父親像は昭斗には憧れだったから、家族写真を撮りに行く日の父の格好には気恥ずかしい反面、嬉しい気持ちもあった。

芦辺写真館の店主は穏やかな人で、笑うと目がなくなってしまうほどの表情を見せる。近隣の出来事をネタにしながら緊張気味の父母を笑いに誘うのが巧みだった。彼がモノクロのポートレート写真で名を馳せた芸術家であると知ったのは、ずいぶん後のことである。

「ではお撮りします。あっ、ご主人の顔が高倉健になっています、今のうちに撮りましょう」とひと笑いさせ、「ではお撮りしまーす、いち、にい、さん。…はい、ありがとうございます」と撮る。毎年、高倉健という名前が出てくる。そういえば昭斗の父親は少しだけ高倉

健に似ているし、本人も自覚しているのか、酔って歌うのは決まって『唐獅子牡丹』だった。「いち、にい、さんと言ってからシャッターボタンを押すタイミング、いつも全然変わらねえなあ。人間、誰にも寿命というものがあって、死ねば跡形もなく消えてしまうけど、芦辺の大将に撮ってもらった写真は永遠に残るだろ。毎年毎年この瞬間に成仏できたって思ったりするもんだ」

父親は撮影が終わると上機嫌で「成仏」という言葉を使った。

一瞬を永遠にとどめる、もしくは永遠を一瞬にとらえる。昭斗は写真というものに不思議な魅力を感じたのだった。

その日は「ゲネプロ」の日だった。メイクや衣装、音響や照明を揃え、通して本番さながらに演じられる。スチールマンにとっても、絞りやタイミングの最終点検ができる大切な機会だった。

左枝をどのように撮ったらいいのか。左枝を上手く撮れるならば、他のスチールもきっと上手く撮れる。昭斗はそう思った。

舞台の上で左枝は、主役の男女が交わすセリフに自分のセリフを絡ませている。それだけでなく、生身の男女が無言で交わす愛憎の糸を引いたりたわませたりしながら、今の二人にとってふさわしい緊張を双方の糸に伝えている。さらに、ファインダーを覗く昭斗にだけわかるように、二の腕や首筋の微かな陰翳が、この瞬間を撮られることの歓びのサインを送ってきている。

後のことなんてどうでもいい。左枝のたゆたいきらめくこの瞬間の姿を永遠にとどめよう。永遠をこの一瞬にとらえてみたい。昭斗はシャッターボタンに指を置いた。